Press Release
【報道関係者各位】
2018年9月

岡田三郎助生誕150年記念

モダン美人誕生

岡田三郎助と近代のよそおい

岡田三郎助《ちゃめの衣》1927年（昭和2） ポーラ美術館蔵

JAPAN'S MODERN BEAUTY

OKADA SABUROSUKE AND HIS CONTEMPORARIES IN THE ERA OF JAPANESE MODERN STYLE

2018.12.8(SAT) - 2019.3.17(SUN)

ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART

MEIJI 150TH 明治150年

展覧会名：「モダン美人誕生―岡田三郎助と近代のよそおい」展
（もだんびじんたんじょう　おかださぶろうすけときんだいのよそおい）
Japan's Modern Beauty - Okada Saburosuke and his Contemporaries in the Era of Japanese Modern

会　期：2018年12月8日（土）- 2019年3月17日（日）
※ 展示替休室（本展のみ）：2019年1月30日（水）
※ 前期展示期間：2018年12月8日―2019年1月29日／後期展示期間：2019年1月31日―3月17日
※ 岡田旧蔵の染織史料はⅠ期（2018年12月8日―2019年1月14日）／Ⅱ期（1月15日―2月17日）／Ⅲ期（2月18日―3月17日）で展示替を行います。

会　場：ポーラ美術館
時　間：9:00-17:00（最終入館は16:30）
主　催：公益財団法人ポーラ美術振興財団　ポーラ美術館
協　力：ポーラ文化研究所
入館料：大人 1,800円（1,500円）、シニア（65歳以上）1,600円（1,500円）、大学・高校生 1,300円（1,100円）
中・小学生 700円（500円）
※ ()内は15名以上の団体料金
※ いずれも消費税込
※ 中・小学生は土曜日無料
※ 中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生および引率教員等の入館は無料

出品点数
絵画約40点、化粧道具類約100点、着物約10点、ジュエリー約20点、その他資料等 合計約200点

主な出品作家
岡田三郎助、楊洲周延、鏑木清方、北野恒富、菊池華秋、速水御舟、榎本千花俊、山田喜作、吉岡堅二、グイード・モリナーリ、藤島武二、和田英作、満谷国四郎、中村彝、岸田劉生、村山槐多、関根正二、梅原龍三郎、安井曾太郎、師岡宏次

イベント

■ビギン・ザ・美人！ 結髪デモンストレーション＆スペシャルトーク
日時：12月15日（土）／講師：村田孝子（ポーラ文化研究所 シニア研究員）、林照乃（結髪師）／
会場：ポーラ美術館 講堂／定員：先着80名／料金：無料（※要当日入館券）

■ギャラリートーク
日時：12月22日（土）、1月19日（土）、2月10日（日）、3月9日（土）いずれも14:00～／会場：ポーラ美術館 展示室
定員：先着30名／料金：無料（※要当日入館券）

報道に関するお問合せ

ポーラ美術館広報事務局　プラップジャパン　担当：屋木、名取
TEL: 03-4570-3172 / FAX: 03-4580-9128 MAIL: polamuseum.pr@prap.co.jp
住所: 〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル33F 私書箱562号

ポーラ美術館　広報担当：中西、藤田
TEL: 0460-84-2111 / FAX: 0460-84-3108
住所: 〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

新しきニッポンの美人、ここにはじまる。

西洋文化が流入しはじめた明治から、平成も終わりを迎える現在まで、生活スタイルの変化とともに女性の生き方は多様化し、「美」の概念も大きく変化しました。
そのなかで人々が憧れる「美人イメージ」は、いつ、どのように作られていったのでしょうか？
本展では、近代の美人イメージの創出に大きな役割を担った洋画家の岡田三郎助（1869-1939）を中心に、日本初の美人写真コンテストや百貨店による流行創出などの時代背景と、ファッションや化粧道具の変遷を追い、現代に通じる「モダン美人」の原点を、岡田ほか藤島武二、村山槐多などの絵画約40点、化粧道具類約100点、着物約10点、ジュエリー約20点に、ポスター・雑誌・写真などを加えた計約200点の展示作品で探ります。

岡田三郎助《ダイヤモンドの女》1908年（明治41）福富太郎コレクション資料室蔵

ココがみどころ

現代の「美人」の原点はどこにあるのか？ ― 日本近代のよそおいの変遷を、絵画約40点や着物、化粧道具などで辿ります。多様化し、変化する現代の「美人イメージ」を捉えなおす試みです。

生誕150年を迎える洋画家の岡田三郎助は、百貨店や雑誌とのコラボレーションを通し、美人イメージや流行の創出に大きな役割を果たしました。本展では岡田の傑作約15点が勢揃いし、さらに絵画に描かれた染織史料6点の展示も実現。岡田の生み出した新たな「美」を、絵画と着物で堪能できます。

貴重な化粧道具類約100点のほか、和装とも相性のいい洋風ジュエリーや、華やかでモダンな銘仙着物も展示。西洋の影響を受けながら変化していく日本のおしゃれ文化を体感できます。

明治から昭和初頭にかけて、日本ではファッションや美意識の一大変革が起こりました。開国後の急速な欧化政策により、江戸時代から続く伝統的な化粧や髪型、服装は次第に姿を消し、西洋式のスタイルが採り入れられるようになります。また大正期には、女性の社会進出や大戦後の好景気にともない、モダンで華やかなファッションが求められ、新しい生活スタイルや娯楽を享受する人々が増えていきます。

この時代、新たなファッションアイコンや理想の「美人イメージ」誕生に大きな役割を果たしたのが、洋画家の岡田三郎助です。明治末頃から、百貨店の仕事や日本初の美人写真コンテストにも携わっていた岡田は、女性のよそおいに敏感に反応し、新しい美人像を次々と生み出していきました。大きな瞳と卵形のきれいな輪郭が特徴的な岡田の女性像は、百貨店のポスターや雑誌の表紙などを通じて広がり、「岡田調の美人」は人々の憧れの的となったのです。本展では、近代の女性のよそおいや美意識の変遷を絵画やポスター、化粧道具、染織史料などで辿りながら、近代洋画の大家である岡田が女性たちの生き方に寄り添い、新時代の「美」を紡ぎ出していった様子をご紹介いたします。

楊洲周延《上野不忍競馬之図》1884年（明治17）［前期］

左:「あやめ文銀製化粧セット」1903-1907年（明治36-40）／右:「五三桐紋蒔絵婚礼化粧道具」明治時代

本展では近代のよそおいの変遷を辿るとともに、新しい「美人イメージ」創出に岡田三郎助が果たした役割を探ります。

第1章 近代の幕開け ― 幕末から明治期にかけての洋装化

グイード・モリナーリ《昭憲皇太后肖像》1897年(明治30)
東京都庭園美術館蔵

上:「五三桐紋蒔絵婚礼化粧道具」明治時代
下:「あやめ文銀製化粧セット」1903-1907年(明治36-40)

明治期の化粧や服装は、江戸時代の慣習を色濃く残しつつも、開国によって徐々に洋風に変化していきました。特に洋装を率先して取り入れたのが、昭憲(しょうけん)皇太后をはじめとする皇族・華族の女性たちです。彼女たちがお歯黒や眉剃り、眉づくりなどの風習をやめていったのを機に、伝統的な化粧や身支度のための道具は次第に消えていきました。当時の浮世絵には、バッスルスタイルのドレスに身を包み競馬を楽しむ女性の姿や、洋装化に合わせた多種多様な髪型が描かれています。

作品解説

「五三桐紋蒔絵婚礼化粧道具」は江戸時代の形を踏襲しながらもお歯黒や眉作りの道具が姿を消し、イギリスより輸入された「あやめ文銀製化粧セット」には洋装のためのマニキュアセット、巻き髪用のコテ、時計などが揃う。化粧道具ひとつにもよそおいの変化が見てとれる。

第2章 モダン美人誕生 ― 岡田三郎助による「美人イメージ」創出

近代の新しい女性像は、日本画、洋画を問わず多くの画家によって描かれましたが、なかでも洋画家の岡田三郎助は、この時代の「美人イメージ」創出に大きな役割を果たしました。岡田は日本初の美人写真コンテストの審査員を務め、その宣伝のための作品も手掛けています。そこに描かれた大きくてうるんだ瞳とふっくらした唇が特徴の顔立ちは、婦人雑誌の表紙などを通じて広がっていきました。こうした「岡田調の美人」は、現代の私たちの感覚に通じるものがあります。

岡田三郎助《君》1908年(明治41)
兵庫県立美術館蔵

「日本美人絵」(時事新報社、1908年(明治41))より未弘ヒロ子

作品解説

《ダイヤモンドの女》は日本で最初の美人写真コンテストの告知宣伝のために描かれた。西洋の宝飾品であるダイヤモンドの指輪をはめ、頬杖をつく女性。コンテストで優勝した少女の卵形のきれいな輪郭と大きな瞳は、絵に描かれた女性に不思議とよく似ている。

岡田三郎助《ダイヤモンドの女》1908年(明治41) 福富太郎コレクション資料室蔵

第3章 作り出される流行 ― 百貨店のイメージ戦略と岡田の美意識

岡田三郎助《あやめの衣》1927年(昭和2)

当時の画家は岡田を筆頭に、百貨店業界や婦人雑誌などの出版業界と深く関わっており、流行の創出に大きく貢献していました。明治末期から近代的百貨店化を進めた三越呉服店のポスターとなった岡田の《婦人像》(1907年(明治40)、石橋財団ブリヂストン美術館)には、大きな瞳が印象的な女性が描かれており、百貨店によるイメージ戦略と最新モードの創成を象徴する作品として知られています。また、岡田は染織品の蒐集家でもあり、自らの審美眼で選んだ着物をモデルに纏わせ、作品に残しました。女性のよそおいに対する岡田の優れた感性は、当時のファッション業界との関わりの中で生み出されたといえるでしょう。

作品解説

《あやめの衣》のモデルが纏う着物も、旧岡田コレクションのひとつ。江戸時代の琳派を思わせる杜若(かきつばた)と八橋の模様や、青と朱のあざやかな色の組み合わせが女性の肌の美しさを引き立てる。さらに背景にはなにも描かず、単一な色調で統一させることによって、体のラインや雰囲気よりリアルに伝えている。日本の伝統的な美意識と油彩による写実性が融合した岡田の傑作である。

「納戸縮緬地 八橋に杜若模様小袖」江戸時代後期
松坂屋コレクション(上野コレクション)寄託作品【展示期間:12月8日 - 2019年1月14日】

岡田三郎助《婦人像》1907年(明治40)
石橋財団ブリヂストン美術館蔵

おかだ さぶろうすけ
岡田三郎助(1869-1939)

佐賀県生まれ。曾山幸彦に洋画を学ぶ。25歳で黒田清輝と知り合い、1896年(明治29)に白馬会結成に参加。同年、東京美術学校助教授に任命される。1897年(明治30)からの約4年間におよぶフランス留学後は、甘美で気品高い女性像を数多く描き、白馬会展や光風会展、官展などで活躍する一方、東京美術学校などで多くの後進を育成した。1937年(昭和12)文化勲章受章。

第4章 モダンガールの時代 ― 花開く都市生活とファッション

榎本千花俊《池畔春興》1932年(昭和7)、各務鉄工石膏美術館蔵【前期】

大正から昭和初期にかけては女性の洋装化が進み、いわゆるモダンガールが街を闊歩する時代となります。しかし市井の人々にとって完全な洋装はいまだハードルが高く、和装を基本に洋風のアクセサリーやモダンな髪型を合わせるなど、これまでにない新しいおしゃれが登場しました。この時代を象徴する銘仙の着物にも、西洋からの影響が、大胆な柄や色遣いとして表れています。絵画に描かれた華やかな女性像とともに、彼女たちを美しく彩った着物、ジュエリー、化粧道具や化粧品をご紹介します。

作品解説

榎本千花俊(ちかとし)の《池畔春興》では、服装はもちろん、女性たちが手にする毛皮やカメラなどの小物もモダンな時代の到来を告げる。また、《口紅を描く》でのスキーなどのスポーツを楽しむ女性は、まさに新しい時代を謳歌する姿で表現されている。1930年頃からは、伝統的な日本画の世界でも華やかなモダンガールが頻繁に描かれるようになった。

左から時計回りに:中山太陽堂ポスター「カテイフード」昭和時代/アクセサリー類
日本宝飾クラフト学院蔵/「アール・ヌーヴォー風鏡台」大正時代/「赤地孔雀羽模様鼓仙看物」昭和時代 個人蔵【後期】/「雅地紙風船模様鼓仙看物」昭和時代 個人蔵【前期】

榎本千花俊《口紅を描く》1932年(昭和7)、各務鉄工石膏美術館蔵【前期】

第5章 多様化するよそおい、変わりゆく女性像

藤島武二《女の肖像》1919年(大正8)、個人蔵

流行のファッションを身に纏い、美を謳歌する女性像が多く描かれた一方で、大正期の自由な気風を背景に、画家自身の個性の表出を女性像に託した作品、また画家にとってのミューズとしての女性を独特な感性で描き出した作品も多く生み出されました。ひとつの価値観に囚われない多様な女性像の誕生も、この時代の特徴です。モデルの個性や心の奥に秘めた感情、そして彼女たちを取り巻く社会状況までをも強く反映した女性像は、美しさを超えて観る者に強く語りかけてきます。

作品解説

藤島武二もまた、自らが蒐集したチャイナドレスをモデルに着せ、東洋的な独自の表現を追求した。その背景には、中国大陸へと進出しようとする日本の社会情勢が見え隠れする。画家たちは国からの要請により、学術調査や取材のために中国や朝鮮、台湾へと足を運んでおり、現地で目にしたエキゾチックな風景や民族衣装が、画家たちの表現意欲をさらにかき立てることとなった。

村山槐多《湖水と女》1917年(大正6)

岸田劉生《麗子坐像》1919年(大正8)

コラム

岡田三郎助《石草風》1909年(明治42)
住友コレクション美術博物館蔵
【展示期間:2019年1月31日 - 2月下旬】

江戸から近代へ―「美人イメージ」の劇的変化

江戸時代、美人のプロマイドとしても流通した浮世絵では、女性の顔は吊り上がった細い目とかぎ鼻、おちょぼ口という類型的なパーツで描かれていました。しかし明治に入り、岡田や黒田清輝、藤島武二といった画家たちは、ヨーロッパで油彩画の技術を学ぶと同時に、西洋人のモデルを描くことを通して、女性像の新たな表現方法を獲得していきます。彼らの描く女性たちは、日本人にとてはやや目が大きく、はっきりとした顔立ちをしていることがわかります。もちろん、当時の女性たちがみなこうした顔立ちだったわけではありませんが、明治の洋画家たちが新しい時代の日本の女性像を生み出し、従来にはない「美人イメージ」を創り上げていったのです。

岡田三郎助《支那婦の前》1920年(大正9)
高島屋史料館蔵

新時代の女性の生き方を支えた岡田三郎助

岡田は百貨店や婦人雑誌の仕事に携わる一方、1916年(大正5)から女子美術学校で教鞭を執るなど、女性の洋画教育にも熱心に取り組みました。大正末頃には自宅アトリエに女子洋画研究所を設け、絵画の道を志す若い女性たちを数多く受け入れます。時代の移り変わりとともに徐々に変化していく女性の生き方と社会進出を後押しするように、岡田は女性たちの歩みをしっかりとサポートしていたのです。また、岡田は1923年と25年に、雑誌「主婦之友」の表紙原画も描いています。そのモデルを務めたのは、みな岡田の愛弟子たち。先進的な生き方を模索する彼女たちの姿は、岡田の画業にも影響を与えたといえるでしょう。

岡田三郎助《紅葉狩(観楓の図)》1908年(明治41) 株式会社三越伊勢丹蔵

ファッション業界と芸術家

近代の画家たちは、今でいうデザイナーやクリエイティブディレクターの役割を担っていました。三越のポスター広告となった《婦人像》や、季節に合わせた広告として大阪梅田駅構内に掲げられた幅約3メートルの巨大な看板絵を描いた岡田をはじめ、高島屋のポスターを手がけた北野恒富(1880-1947)、同じく高島屋の染織品の図案を考案した竹内栖鳳など、百貨店とタイアップし、商品や広告を手がけた芸術家は枚挙に暇がないほど。画家の描く絵画が百貨店のイメージや流行のファッションを象徴するものとなったのです。

※ 所蔵の記載のないものはすべてポーラ美術館及びポーラ文化研究所蔵